

# 社会情報学の方法とエスノメソドロジー

— 或る「調査実習という現象」の考察から —

井上 芳保

In this paper, we try to demonstrate that Ethnomethodology is effective to open up the new social science as Social Information science. To investigate this fact, we take up a concrete example of a social research at an old-people's home. However, our main interest is not in the results of this research, but in the phenomenon so called "social research practice". Especially we investigate that "social research subject" is only one of this phenomenon, and that (s) he cannot stand at out of the phenomenon.

It seems that the stern reflection is demanded on social research which has no consciousness about the fact that a situational definition, as "it is a social research practice" contributes to construct a "meaningful world". When we refer to the power peculiarly in the Information Society, we should not only be aware that Data-base becomes one panopticon, but also be aware that we-ourselves as a social researcher are inevitable to the panoptic power. This awareness just will be related to critical reason which is much effective to resist the controlled-society bringing from the Information Capitalism. And Ethnomethodology as a radical method, is an effective practice to do such critical reason.

1. はじめに
2. 情報資本主義における社会情報学の課題
  - (1) パノプティコンとしてのデータベース
  - (2) 知的好奇心と同居する知的障害者差別
  - (3) 電子メディア社会に必要な批判的理性
3. 或る老人ホーム調査における「意味ある世界」の構築過程
  - (1) 或る老人ホーム調査の経緯
  - (2) 精神病院入院歴のあるAさんへのラベリング行為
  - (3) なかなか実施できなかった寮母の聞き取り調査
  - (4) 「答えたくないことは答えなくてもいいですよ」
  - (5) 或る「調査実習という現象」の構成要素
  - (6) 発話行為に含まれる情報量の問題
4. 社会情報学的方法の規準とエスノメソドロジー

- (1) 伝統的社会学が成立している基盤の解体
- (2) 発話行為、その相互反映性と文脈依存性
- (3) 小括と展望——生成の不確実性に耐えるエスノメソドロジーへ

## 1. はじめに

本稿は、社会情報学という新しい学問を切り拓いていくにあたって、エスノメソドロジーという方法が有効であることの論証を図りて書かれる。検討の具体的素材としてこのほどわれわれが行った、或る老人ホーム調査を取り上げる。但し、その調査結果にというよりも調査そのものを一つの現象として捉えることに主たる関心は向けられている。とりわけ「調査主体」が現象の外に立つ特権的存在ではなく、現象の一部としてあるしかない点が検討される。

「調査」なる状況定義それ自体が「意味ある世界」を構築してしまっている事実は無自覚な社会調査への厳しい反省が要請されている。情報社会に特有の権力を語るとき、データベースのパノプティコン性が問題となるならば、「調査主体」としてのわれわれ自身もまた権力と無縁ではないことを自覚すべきだろう。その自覚こそ情報資本主義のもたらす管理社会化に抗していくのに多大な意味を有した批判的理性につながるものであると思われる。エスノメソドロジーというラディカルな方法はそのような質の批判的理性を実践する方法なのではなかろうか。

## 2. 情報資本主義における社会情報学の課題

### (1) パノプティコンとしてのデータベース

新しい電子メディアが次々と開発されている。バーチャルリアリティ(人工現実感)、人工知能に加えて人工生命という語まで登場した。それらの実態が未だ語感の与える衝撃ほどのものではないにしろ、情報社会化は着々

と進展している。技術者たちは人間の生活に多くの便益をもたらすと信じてそれらの開発を進めている。その主観的善意は疑うべくもない<sup>(註1)</sup>。実際、情報と知の消費を加速化する電子メディア社会には便益性に満ちている部分もあるだろう。

だが、果たして電子メディア社会を語るとき、それで十分であろうか。情報の過剰には人間に幸福をもたらすとは限らない側面はないのか。情報社会の到来は人間にとっていかなる意味を有しているのか。電子メディア社会は現実には一つの生産関係の所産として存在する。社会科学に従事する者ならば、情報資本主義の基本的な構図を把握しないまま、電子メディア社会や情報社会について楽観的に語ることは軽率のそしりを免れまいと思われる。社会情報学においては或る特性を有した知の消費を強要する性向を持った情報社会の到来それ自体が考察の対象とされるべきなのである。

情報社会において働く権力という問題については、マーク・ポスターの『情報様式論』[文献(12)]に詳しい<sup>(註2)</sup>。この書物の中でポスターは、例えばデータベースという現象を一つのパノプティコンとして捉える斬新な視点を提示している。むろん、パノプティコンとはフーコーが『監獄の誕生』[文献(2)]などの監視権力論において論じている一望監視のシステムのことである。それは見られずに見るという一方的なまなざしのもとに人間をおくことを特質として行使される近代的な権力を象徴している。監獄の中の囚人は、いつも見られているかもしれない可能性の中で「従属した主体性」の確立へと向かう。ポスターはこれと同じ事態がデータベースの普及した社会の場合にも発生すると考えているのであ

る。

ポスターは「すべての場所、すべての時代における、すべての情報」というデータベースの理念の不気味さに対して鋭敏である。技術革新の成果としてのデータベースにおいて「デジタル・コード化と言語・イメージ・音響の電子的複製はコミュニケーションの時間的・空間的限界を無化する」ほどになっている。「すべての知識がどんな人でも利用できるようになる教育社会という啓蒙の夢」も実現可能となった。考えてみると、このような「啓蒙の夢」を近代社会はその成立の当初からめざしてきたのかもしれない。

データベースによっていとも容易に情報が入手されるということは、われわれがいつ覗かれているかわからない監獄の中の囚人同様、意識の面で丸裸にされてしまう可能性の増大を意味している。フーコーが指摘するように権力は網の目のように遍在する。「いつでも、どこでも、だれでも」という普遍性を志向する可能性の次元と、実際に生きている人間にとっての必要性の次元との大いなるギャップを見過ごすわけにはいかない。可能性の開発は、新しい「欲望」を喚起する。こうして本来の必要性を超えた「欲望」の充足が悪循環的に正当化されていく。そもそも「欲望」の無限更新こそ資本主義の基本戦略であったが、情報社会段階に達してそれは「すべての場所、すべての時代における、すべての情報」への欲望へと進化したと考えられる。この事態に不気味さを感じず感覚は社会情報学をする者にとって重要なものである。

ここでポスターの展開している主題のライトモチーフはフーコーが「知への意志」として、或いはさらに遡ればニーチェが「権力への意志」として定式化したものである。人は今や「情報への意志」「データベースへの意志」に追いまくられることとなる。正当にもポスターは「データベースの言説であるパノプティコンは情報のポスト・モダン、ポスト産

業社会様式における大衆制御の方式」と把握している。本人が気づくか否かにかかわらず各個人のアイデンティティはポスト産業社会様式の中で新たな質の権力の磁場として機能し始めるのである。データベース権力とでも呼ぶべきものの危険性にポスターの関心は注がれている。実際、フーコーの洞察した監視型権力はポストモダンと言われる状況においてより精錬された形で貫徹している。ポスターはそれを超パノプティコンと呼ぶ。

## (2) 知的好奇心と同居する知的障害者差別

知的好奇心は誰にでもあるものだから、知的好奇心一般を否定することはできない。しかし、意識現象として発生する知的好奇心是一種の社会的生産物として考えてみる必要がある。いかなる種類の知の消費が社会的に期待されており、その結果としていかなる問題が見えにくくなっているのかは知識社会学的に考えてみるべき問題である。ポスターの問題提起を知ってしまった以上、われわれは科学的な「真理」に接する機会が増えたからといってそれを手放して賛美する楽観主義のままではいられない。

そのようなことを考える上で恰好の素材となる事例を最近の経験から挙げてみよう。正確なタイトルは忘れたが、昨秋、某理系教員の強いすすめがあって見たNHKスペシャルの科学番組に脳の働きを扱ったものがあった。養老孟司と樹木希林が出ていた。脳の或る部位の欠損のために「動き」というものが一切認知できなくなっているスウェーデン人女性が写っていたシーンは印象に残っている。彼女は、コップに水をちょうどいい量まで注ぐことのできない。彼女によって生きられた世界とは写真のように止まった世界である。われわれの生活世界にとって持つ大脳という生理的部位の役割を思い知らせてくれるという意味で、それは確かに私の知的好奇心を刺激する内容の番組であった。

しかし、それ以上に私に印象的だったのは、大脳の左半分がほとんど働いていない知的障害者の日本人男性が番組全体を通して登場したこと、そして女性のナレーターが彼を終始「〇〇くん」とまるで子供扱いで呼んでいたことである。但し、養老孟司が彼に言及するときは「〇〇さん」と呼んでいたことは言い添えておこう。番組のどこかで語られたと思われる彼の正確な年齢を私は残念ながら覚えていないが、既に成人に達していたことは確かである。そのような彼を番組のナレーターは「〇〇くん」と呼び続けた。

彼は絵を描くのが得意である。彼の片目はほとんど見えない。これと決めた対象をくいいるように長い時間かけてじっとみつめ、感じ取ったことをそのまま絵にしていける。その純朴なタッチは独特のものである。番組の中でカメラは彼が真剣な表情で絵を描く様子を執拗に追いかける。そして彼の脳の左半分がほとんど働いていないことを示す、鮮明なコンピューターグラフィックによる脳のモデルがクローズアップされて解説が加わる。こうして脳のモデルと彼の行動との対応関係が強調される。要するに彼はそこでは一つの症例としてのみ存在理由がある。彼を一個の人格的存在として扱う必要性をこの番組では少しも感じていないように私には思われた。

「障害」者、とりわけ知的障害者の人権は今の日本社会においては一般に侵害されがちである。現に施設では大人の「障害」者が年下のボランティアから「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と呼ばれることがしばしばみられる。恐ろしいのはそのような関係性が何の違和感もなく日常の一部として定着してしまう事実の存在である。相手をどのように呼ぶかは、[いま、ここ]で発生する権力を問題とする際にしばしば大きな意味を持っている<sup>(註3)</sup>。一般に「介助者—被介助者」の関係は、「支配—服従」という関係に転化しやすいし、介助者に優越感のような意識を発生させやすいといえる。そ

の場合、介助者には「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と呼ばれる側の抱く気持ちへの想像力が枯渇している。それは、対等な人間として相手と向き合おうとするものではない。上に挙げたNHKの科学番組をわれわれはそのような事例の一つとしては考えられないだろうか。

何より指摘しておかねばならないのは、大脳の働きという「真理」に関わる知的好奇心の充足と知的障害者差別が同居しかねぬ点である。ここでわれわれは始めの問いに再び戻らねばならない。すなわち、いかなる種類の知の消費が社会的に期待されているのか、他方でいかなる種類のことが問題にされにくくなっているのか、というあの問いである。テレビという電子メディアを介して多くの人々に向けて発信されたNHKの科学番組の社会的機能。それは見る者の知的好奇心を満たす内容を含んでいた。しかし、そこには知的障害者差別につながる要素も含まれていたと思われる。それは微妙で気づきにくいだけに注意しないと見落とされがちな差別である。「〇〇くん」の左脳の機能停止状態を示す鮮明なコンピューターグラフィックと「〇〇くん」の行動との対応関係には確かに「真理」がある。しかし、ポスターならばそこにポストモダンの形態の「大衆制御の技法」を見出すのではないか。

### (3) 電子メディア社会に必要な批判的理性

ファシズムの歴史を生きた社会学者であるアドルノとホルクハイマーは、近代社会の用意した啓蒙という大義名分の中に潜む「野蛮」を手厳しく告発した[文献(1)]。ユダヤ人の虐殺のためにアウシュビッツの収容所で道具的に使用された理性を彼らは道具的理性と呼ぶ。そこでユダヤ人たちは最も合理的な形で計画的に殺されていったのである。そのような理性は「野蛮」にほかならない。アドルノたちがそれに対置したのは批判的理性である。それは敢えて言うなら理性のあり方それ

自体を批判的に捉え返す力を備えた自己言及の理性である。批判的理性の精神に立って、情報資本主義がわれわれにもたらすものの考察を進めることこそ社会情報学にとって重要な課題であるといえよう。ポスターの情報社会論はそのための一つの有力な指針となる。

知的好奇心の充足と知的障害者に対する差別意識の同居という事実に固執するのは、情報資本主義において最も中心的な差別が発生すると予想されるのが知的能力をめぐる問題だからである。フェミニズムの隆盛という社会現象を、男女差というモダン社会においては決定的な重要性を有した差異が意味を失ったことから説明する分析がある。情報が主要な資源となるポストモダン社会において決定的な意味を有した差異は性別に代わって知的能力となる。知能の優劣という基準からみての人的資源の品質管理のようなことが情報社会においては大きな意味を持ってくる可能性がある。ここにはかつてナチズムを成立させたのと同様の質の「見えない優生思想」の危険性が潜んでいる<sup>(註4)</sup>。

例えば、遺伝子診断技術の動向はこの文脈から気になることの一つである。すでに技術的には血液などから取り出した遺伝子の異常を調べることで、将来何かの病気にかかる可能性をかなりの精度で予測できるところまで来ているという。また現在、日米欧各国の国際協力で進められているヒト・ゲノム解析計画とは、人間生命の設計図ともいえる遺伝情報の総体を解明しようとするものだが、それによってあと何年かもしれば人間の全遺伝子の機能が明らかになりそうな見通しだという。すでにハンチントン舞踏病などいくつかの難病の原因となる遺伝子は突き止められている。

ヒト・ゲノム計画の推進は遺伝素質の問題をクローズアップさせる社会的効果を持っている。現にアメリカでは遺伝病の患者が親類にいただけで生命保険などへの加入を拒否さ

れるということが発生している。将来発病すると告知されて、その治療の方法がまだない病気の場合、告知された人には苦痛だけが残る。これは情報の過剰が人間を幸福にしない一つの典型例である。さらに遺伝素質を理由として特定の資質の人達の差別と排除が発生する可能性も考えられる。これは当人の悪意の有無という問題ではなくて、構造的にみてシステムが悪用される可能性が当然考えられるという種類の問題である。個人情報保護や差別防止対策はデータベースが便利なものであればあるほど必要になると思われる。

この他に「情報への意志」が強迫観念化したデータベース・オタクの生態分析、或いはまた情報資本主義段階ならばこそ加速化する人間身体の商品化現象に潜む「野蛮」の告発等々<sup>(註5)</sup>も社会情報学にとって重要な課題であるといえよう。だが、われわれの構想する真に批判的理性の立場に立つ社会情報学は、さらにその先を切り拓かねばならない。何より現象の外に立つ観察主体という立場から脱する具体的工夫をわれわれは模索しなければならないのである。実はそのような自己言及的な内実を備えた方法論として以下に紹介するエスノメソドロジーは興味深いのである。

### 3. 或る老人ホーム調査における「意味ある世界」の構築過程

#### (1) 或る老人ホーム調査の経緯

本学部には「社会情報調査実習」という科目が設置されている。93年度はその一環として福祉をテーマとした班が設けられ、主に或る老人ホームの調査を行った。そこで生活している老人と寮母の聞き取りが学生諸君によって行われた。市の福祉行政や施設における老人福祉の実態がこの調査によって明らかにされた。それはそれで意味のある調査であったといえる<sup>(註6)</sup>。しかし、ここではそれとは全く別の切り口からこの調査のことを考え

てみたい。今の私には今回の調査を振り返ってみて、対象の外に立つ調査というものの幻想性が透けて見えてきたような気がしているのである。

老人の聞き取り調査は夏休みに福祉班の学生諸君と手伝いに来てくれた北大の院生・学部生諸君とを合わせ、計10名の調査員で行われた。聞き取りの際には原則として調査員2人が一つの組になった。調査対象者となった老人は全部で35人。これは全入所者142人のうち24.5%にあたる。普通に生活できる老人から全面介助の必要な重度のねたきりの老人まで様々な状態の老人がこの施設では生活している。そのうち誰に調査対象者になってもらうかは施設の側と相談して決めた。意識がはっきりしている人に限られたが、意識があっても情緒不安定であるとか、体調が思わしくないなど面接が難しいと施設の側で判断してくれた老人ははずされた。

質問項目は特に細かく決めたわけではないが、現在の施設での生活と施設への意見については重点的に聞くこととした。話好きな老人もいればそうでもない人もいる。話題の進行は成り行きに任せるといふかなりおおらかな聞き取りであった。長時間かけて行われたケースではライフヒストリーに立ち入った話を聞くことができたようである。調査員は自分の面接した個々の老人のこれまでの人生に関わる多くの情報を入手できた。これは夏休みという時間のふんだんに使える時期に実施したことが幸いしての成果であったが、実施にあたって施設の職員がたいへん協力的であった点も忘れてはならない。いや今にして思うと、単に協力的という以上に職員たちはかなり熱心に個々の老人について情報提供してくれたとさえいえるだろう。

## (2) 精神病院入院歴のあるAさんへのラベリング行為

当初の計画では面接の対象は老人だけで寮

母の方は対象者として考えていなかった。寮母たちの聞き取りをすることにしたのは、私自身が或る老人（仮にAさんとしよう）の聞き取りをしてからである。Aさんは71歳の男性。このホームに来るまでの35年間を精神病院で過ごしてきた経歴があり、これまで未婚であるという。Aさんには学生は割り振らず、私と院生（女性）の二人で面接をすることになった。これは寮母主任（女性）と副所長（男性）の二人からのアドバイスを受け入れて取った措置だった。「Aさんはちょっと問題の人だからなあ」「あの人は今、躁の状態だから」「あの人は時々感情的になる人ですから」「もともと恋愛妄想のある人だから女子学生は近づけない方がいいですよ」等々と二人は私に親切にも言ってくれたのである。

正直に言うが、Aさんに会う前の私はそのようにさんざん脅されていたので内心びくびくものだった。しかし、実際に会ってみるとAさんはごく普通の老人であった。「今、躁の状態」ということもわれわれの見た限りでは特になかった。面接はAさんの居室で行われた。Aさんはベッドの上にあぐらをかいて座り、われわれ二人は丸椅子に腰掛けて向き合った。二人部屋であった。すぐ近くで同室のもう一人の老人に対して学生二人が面接をしていた。それは終わりかけていた。同室の人はその後しばらくその場にいたが、途中からいなくなった。同室の人がいるうちはあまり大きな声で話ができなかった。Aさんとは約45分の面接であった。録音はしていない。

Aさんは最初、こちらの緊張を察して当惑した表情を一瞬のぞかせたが、われわれの質問にはきちんと答えてくれた。生い立ちから病歴まで順序立てて話してくれた。35年間の精神病院生活は彼には随分と忌まわしいものであったようで、そのことに触れると顔を下に向けた。あそこにいるうちに自分の人生の一番いい部分が過ぎてしまったのが残念と繰り返し述べていた。あそこにはもう戻りたく

ないという趣旨のことも述べていた。ベッドの側には宗教団体の新聞と短歌の本があった。「施設に対しての不満」については最初は「何ありません」と言っていたが、後になって具体的な生活の話をした折りに「食事の味が自分には合わない」「中華料理をもっと食べれたらいい」「もっと本が自由に読めるといい」「できれば個室がいい」等とも言っていた。

むろん、一度会ったくらいで本当のことをどれだけつかめるものなのかと言う問題はあるだろう。ことによるとAさんはわれわれの前で「ごく普通の老人」を懸命に演じていたのかもしれない。「普通ではない」と認知されることは彼としては何としても避けたい事態であったはずである。終わり近くにAさんは「ベッドでは本当は禁止されているんだ」と言ってタバコを吸い始めた。ティッシュにその灰を落とし、唾をかけてまるめた。まるめる指に力が入ってティッシュが破れた。また昔の友人から以前にもらったというハガキを大事そうに見せてくれた。それがカセットテープの写真入りインデックス・カードを再利用したものだったのを妙に覚えている。話を聞き、全体的な様子を伺っていて孤独なのだろうという感じを受けた。また寮母や周囲の人がAさんに対して普段から貼っているであろう「恋愛妄想」「精神的に不安定」等のラベルがAさんに与えている苦痛は何となく察しがついた。今の生活への不満は「何ありません」どころではないと思われた。

人間ならば誰でも、日常生活の中で感情が高ぶることがある。しかし、Aさんの場合には少しでも感情的な様子を見せると、寮母はじめ周囲の人たちは直ちに「これまで精神病院にいた」という前歴を想起し、「やっぱり……」ということになるのである<sup>(註7)</sup>。そうすると日常生活において感情を極力抑制しないことには彼は「正常」とはみなしてもらえないことになる。もっと言えばAさんが周囲の人からみていかにもその前歴にふさわしい態

度を示したときだけ周囲の人は彼に関心を払うのではないだろうか。その場合にだけ彼は周囲の人の相互作用の対象になるのだとしたら、彼に対する周囲の偏見に満ちた認識はそのつど強化されることとなるものと思われる。これは悪夢的な悪循環の構造である。精神病ではない人でもこういう状況におかれたらおかしくなる。まして精神病の前歴のある人にはこれは過酷な環境である。予言の自己成就というマートンの概念が想起される。

### (3) なかなか実施できなかった寮母の聞き取り調査

このAさんの聞き取りを終えてから、私にはそれまで施設で自分が見聞きしたいろいろなことが気になってきた。例えば調査の実施に先立って、どの老人にいつどの場所でどのような形で聞き取りを行ったのかという相談を寮母主任、副所長と行った場面、手の空いた寮母や事務職員と立ち話をした場面が想起された。Aさんに限らず老人たち個々の個人情報に関して施設の人たちは実に詳しくかった。例えば「〇〇さんは子供との関係で傷ついているから家族のことに触れるといやがりますよ」「〇〇さんは話がぐるぐる回って先に進まない人だからたいへんですよ」「〇〇さんはプライバシーなんか気にしないでいい人だから居室でやっても大丈夫ですよ」等々。そして誰それさんにはどういうタイプの学生さんがいいといった類の事細かなアドバイス。

正直に言うとわれわれはそれらの個人情報結構、頼りにしていた。面接にあたってそれらが実際に役立ったことがあったのも否めない。例えば、偶然、激しい喧嘩の場面を目撃したが、その当事者はやはり仲が悪いと最初に聞いていた二人のおばあさんだった。インタビューをしに、これから全く知らない相手の所に行くのであるから、事前に得た情報は貴重であった。例えば、その人がオムツを

しているか否かなど個々の老人別の基本的事柄については予め担当学生に伝えておいた。だが、Aさんの聞き取りを終えてから私には寮母たちのわれわれとの対応時の「よくぞ聞いてくれた」という感じの嬉しそうな、実に生き生きした表情を浮かべての饒舌さが何かおそろしいものに思えてきたのである。

むろん個々の老人に関する情報のストックを豊富にしておくことは寮母として仕事をしていく上で必要なことではある。しかし、老人の立場からすると自分のことについてあまりに事細かに把握している——少なくとも寮母当人はそう確信している——人々に囲まれて日々の生活を送るのはかなり気持ちの悪いことではないのだろうか。寮母の方は老人のことを詳しく知っているが、老人の方では寮母のことをそんなに詳しく知らないし、知る術もないという非対称的關係が様々の抑圧を生まないはずはない。

そもそも「〇〇さんはプライバシーなんか気にしないでいい人だから……」などという資格で言い切れるのであろうか。できるだけ他の人のいない状況でということでも申し入れたにもかかわらず、結果的には相部屋の人がいる環境のままで面接をしたケースが結構出現したが、これは「プライバシーなんか気にしないでいい」ことしか聞けなかったということかもしれない。「意味づけられる老人と意味づける寮母」という図式がここでまず浮かび上がって来ざるを得ない。

老人たちに関する寮母からの個人情報が必要しも正確ではないという問題も指摘しておかねばなるまい。Aさんへの固定的なラベルと同じようにそれぞれの人にもラベルが貼られているのだろう。それらが固定観念に基づいた歪んだものであるにもかかわらず、剥がすことがきわめて困難だとしたら、他に行き場のない状況におかれている老人たち——これは老人ホームという施設にいる老人全般に言えることである——には、その場合、どう

いう選択が残されているのだろうか。

またそのとき「今の生活に不満はありませんか」とたずねるわれわれの行為はどのような意味を持つことになるのであろう。インタビューの折りには、寮母や同室の人が近くにいたケースもあった。仮にいないにしてもこの質問は相手との信頼関係なしには正直には答えにくいものであるだろう。果して、こう聞かれて返ってくる「何の問題もありません」との回答を老人たちの生活実感を正しく反映したものと受け取っていいのだろうか。そう考えると、意識調査とは尽々難しいものだと思われてくる。

ところで、老人の聞き取り調査はすんなりとできたのに比べて、追加調査として行った寮母の聞き取りの実施は難航を極めた。夏休みの終わりに申し入れをした折りには寮母主任が愛想よく承知してくれたにもかかわらず、実際にはなかなか調査をさせてもらえなかったのである。先方の都合のつく時ということで約束した日時に揃ってでかけたのに、急用により断念ということが二度続いた。そのうち一度は控室で一時間あまり待たされたのち「急に全員で大掃除をすることになったので」という理由でダメになった。すでに夏休み中ではなく、普通に授業が行われている期間になっていたから、われわれの受けた犠牲は決して小さくなかった。四時間目のゼミを早く切り上げ、或いは各自のアルバイトやサークルの予定をキャンセルして都合をつけたりしたことが全て無駄となった。

もちろん一日中、或る意味ではいつでも時間のとれる老人たちと、次から次へとあれこれとせわしく仕事をしていて忙しい寮母では全く条件が違うということはある。しかし、どうもそれだけではなかったようだ。後でわかったことだが、調査の便宜を考えて面接の事前に調査票を配付して基本的事柄について記入してもらう方式をとったことがかなり影響していた。その質問紙には学歴や職業経歴、



現在の仕事の継続意志などプライベートな質問が盛られていたのだが、それらについて答えたくないという声が一部から上がり、連鎖反応を引き起こしたのだという。最初に予定がキャンセルになった後、寮母主任が回収して郵送してくれた調査票は半数近くが全くの白紙であった。

#### (4) 「答えたくないことは答えなくてもいいですよ」

この行為にはたぶん「もう諦めてくれ」というメッセージが含まれていたのだろう。だが、それを感じつつも「調査実習」という授業の一環という点を強調して私は粘ることにした。老人の聞き取りだけではこの老人ホームの全体像をつかめないと強く感じたのである。学生諸君にもそのことは伝え、了解を得た。

かくしてどうにかこうにかわれわれの寮母調査は実施された。結局、午後の仕事の時間に空き時間のできた人から随時、という条件下で行われたので面接の時間は老人の場合と比べて遥かに短くなった。やるなら皆同じように、ということになり、結果として全数調査になった。仕事が一段落する時間帯は大体同じなので来るとなるとドッと来る。こちらの人員が絶対的に不足したのでこのときは私自身も調査員としてフルに稼働した。老人のときと違って一対一のインタビューとなった。応接室、宿直室、食堂の一角などプライバシーが守れる場所が総動員されて全く個別の形で行われた。

私が行ったケースの場合、相手は非常に協力的態度で対応してくれたが、後で聞くとこころでは学生によってはかなりぞんざいな対応を受けたケースもあったようである。わずか5分くらいで済んでしまった気ぜわしいインタビューもあったと聞いている。「もういいんでしょ。忙しいんだから」という対応を年配の寮母から受けた学生もいた。こうして調査

員が誰であるかという要素の面接調査に占める比重を痛感したという意味で教訓的な調査となった。同じ質問をしたとしてもその場合、回答内容にも微妙なズレが発生している可能性は大きい。コミュニケーションが生き物である事実、発話行為はそれを成立させている状況を含めて考えねばならない事実を示す恰好の例である。

もちろん寮母主任には感謝しなければならない。これはけっして皮肉な意味ではなく、本当にそう思っている。彼女はわれわれと拒絶反応を起こした寮母たちとの間にはさまって調整に苦勞して下さったようだ。結局、「答えたくないことは答えなくてもいいということですよ」という確認の上でやっと面接をさせてもらえることになったのである。「これから仕事が入っているから」と相手が言い出せばそれまでという調査環境は一般的に考えれば、どうみてもあまり好ましいものではなかったといえよう。

けれども見方を変えれば「答えたくないことは答えなくてもいい」という寮母側との約束でやっと実現できたこの調査には、相手が何を「答えたくない」と感じているかを包み隠さず表出する効果があったとも考えられる。例えば、細々とした学歴や職業経歴、現在の仕事の継続意志などは答えたくない事柄である。労働社会学的興味からこうした質問項目が調査票に盛られることは少なくないが、われわれ自身ももし調査対象者だったらやはりそれらにたいして「答えたくない」と思うのではないか。

「答えたくないことは答えなくてもいいですよ」なるアナウンスを寮母主任が寮母全員に敢えてしたということは裏返して言えば「答えたくないことも答えねばならない」との不安が寮母たちの間に存在していたことを意味している。また「大学の行う調査だから」面倒だが、断るわけにもいかないだろうという関係性の下にこの「調査実習」が行われた

ことをも意味しているのかもしれない。私が「調査実習」という授業の一環という点を強調したこともたぶん少なからず作用していただろう。エスノメソドロジイ的にはこれらのことは重大関心事となる。

録音テープは一切取っていないが、「これから仕事が入っているから」等と相手が言い出す前に何がたずねられたか、どういうコミュニケーションが調査員との間であったのかを精密に分析するならそれなりに意味のある成果が生まれるだろう。そこにはきっと質問紙を使った「今の仕事に満足していますか」の選択肢式の質問以上に遥かに多くの「生きられた現実」が含まれていることだろう。会話分析に関心の強いエスノメソドロジストなら、なぜそれを録音しなかったのかと詰問するかもしれない。

しかしながらここで今、何よりも問題とすべきは「調査実習という現象」がわれわれの前に大きく立ち現れた点である。われわれ外部の人間によって老人ホームという場に持ち込まれた「調査実習」それ自体に含まれている「調査主体—調査対象者」という関係性規範は何をもたらしたのか、このことについて一切の先入観なしに考察してみるなら何かは浮かび上がってくるのではないか。「調査実習」と意味づけられたわれわれの行為が、いかなる相互作用を誘発したのかに光をあてなければならぬのである。

#### (5) 或る「調査実習という現象」の構成要素

「答えたくないことも答えねばならない」状況が成立するのは何故か。われわれの持ち込んだ「調査実習という現象」を受け入れざるを得ない関係性がそこにあるからである。「意味づけられる老人と意味づける寮母の非対称性」と先に述べたが、それを今は「意味づけられる老人・寮母と意味づけるわれわれの非対称性」と言い換えるべきだろう。この関係性は少なくとも表向きには抵抗しがたい効力

を発揮しがちだといえる。

むしろそれが表向きだけであることも強調しておくべきだろう。本当はわれわれだけが意味づけていたなどとは全くの思い上がりもいいところで、われわれもまた老人や寮母たちから様々に意味づけられていたにちがいない。現に「耳をダンボさんにして」老人たちの調査終了後の会話を廊下で傍受したところ、われわれの噂話がたっぷり含まれていたのが聞き取れたという学生の証言もある。老人も寮母も一方的に意味付けられるどころか、今回、われわれによって外から持ち込まれた「調査実習という現象」を結構、楽しんでいたらしいのである。「学生さんの勉強のために」サービスしてくれつつ。

ちなみに「耳をダンボさんにして」みるといろいろなことが聞こえてくる。言葉になって現れない心の声も聞こえてくることもあるだろう。もしそうなら、それをきちんと聞き届けることこそ調査において最も大切なものだといえる。それが具体的にどういうことかは後で触れる。ただこの場合での「耳をダンボさんにして」は、もとより立ち聞きすることではない点だけは確認しておこう。

さて、老人も寮母もわれわれ調査員も全く同等の資格で「調査実習という現象」の構成要素とならざるを得ないことがここで確認されよう。「調査主体—調査対象者」という関係性が固定的なものとして成立していると考えることが大いなる幻想なのである。「調査員—寮母—老人」という三者関係のモデルを考えてみると、寮母はここでマージナルな位置にある存在である。寮母の方では、当初自分が「調査対象者」になるとは全く考えていなかったもので、調査員と同じく「調査主体」として振る舞っていて、たいへん協力的だった。それが後で自分たちも「調査対象者」となると知ったときに、大きな心理的動揺が起き、抵抗が激しくなったのであろう。もし先に老人の調査だけするということがなかったら、

もっとすんなり寮母調査は実施できていたのかもしれない。しかし、ケガの功名で、すんなりとできていたなら見えなかったことが浮き彫りになったのである。

今にして思うと寮母主任と副所長による老人の選定において、いわゆる「優良老人」が多く、「不良老人」「問題老人」は少なかったのかもしれない。「優良老人」とは模範的に調査に応ずる身構えのできた人である。施設の方で選んでくれた「調査対象者」である老人の側には「調査のために外から入ってきた人間にはできるだけ好印象で対応しなければならない」という規範が少なからず働いていたといえる<sup>(注8)</sup>。

また調査員である学生諸君や私の方はどうだろう。やはり「調査のために外から入って行く人間としてできるだけ好印象で対応しなければならない」という規範が少なからず働いていたといえる。また私がAさんの事例について彼らに細々と話し、寮母に対する先入観を与えてしまったことも面接時の相互作用に影響していたといえよう。そして施設にとっては「大学の授業の一環としての調査実習」は拒否しにくい性質のものである。とすればやっかいなことだが、それなりに対応するしかないことになる。こうして「調査員一寮母一老人」の三者による「意味ある世界」の構築作業が始まったのである。

#### (6) 発話行為に含まれる情報量の問題

寮母の場合、ごく短時間でしかも「答えたくないことは答えなくてもいい」という条件でインタビューは行われた。これに対して老人の場合、長時間にわたって可能な限りたくさん話が聞ける条件でインタビューが行われた。われわれはどちらからも「調査実習のために有益な情報」を入手できたといえる。むしろ一般的には、たくさん話を話してくれた方がありがたいにはちがいない。実際、自らのライフヒストリーを楽しみながら語っ

てくれた老人も少なくはなかったようである。それを楽しんで聞き取り、満足感を堪能して家路についた学生諸君も少なくはなかったと思われる。

この満足感はそれ自体としては別に責められるべきものではない。われわれの持ち込んだ「調査実習という現象」には当事者に主観的満足をもたらすという意図せざる効能があったのかもしれない。時間がたっぷり使える自由はうらやましい限りである。ただ、一つ注意すべきことがある。長時間と言っても老人一人あたりせいぜい二時間くらいが上限である。限られた時間の中で何が語られ、別の何が語られなかったのか。そこが問題であるとは考えられないだろうか。

表現行為は常に表現し得なかったものとの関連で捉え直されねばならない。われわれが老人の生活を知ることから始めようとしたことは確かだった。例えば、相撲好きの老人が多く、大相撲のある時には星取りのゲームも施設で企画していると事前に聞いていた。そのことは学生諸君にも伝えておいた。かくして学生諸君から回収されたインタビュー記録には「相撲が好き。特に若貴のファン」という記述が多くなったのである<sup>(注9)</sup>。「若貴が好きですか」と聞かれればたいいの人「好き」と答えるにちがいない。実はこのような問いを発する行為自体が一つの権力作用なのである。「相撲好きの老人」とは「常識」が受容しやすいイメージである。「若貴のファン」も同様である。そのイメージに自分を同調させているだけの老人もいるのかもしれないのである。

今回の調査の全てがそうだったとは言わないが、相撲の話に代表されるあたりさわりのない話題で時間を費やす行為は「答えたくないことも答えねばならない」という心理的脅迫が存在する場合に一つの逃避の手段となる可能性がある。可能性としてはそれが「たずねたくないこともたずねねばならない」状況

におかれた調査員との無意識の共犯関係のうちに進行することもありえよう。この場合「答えたくないことは答えなくてもいい」という寮母の条件の場合とそれほど変わらない効果が生まれている。少なくとも長時間話して得られた情報が多いからよかったというのでは「社会情報調査実習」履修学生としては甘すぎるように思う。発話行為そのものの存立基盤が問題とされねばならない。

情報の定義は様々にあるが、社会情報学的には或る観点からみてという条件付きではじめて情報量が多いとか少ないとか言えると私は思う。老人の心の声を聞くという観点からすると先の状況での「若貴が好き」という発話自体の情報量は少ないことになる。

現象学に自然主義的態度という概念がある。「現実」の構成を批判することのない凡庸な態度という意味である。発話行為から多くの情報をつかみとるためには自然主義的態度を脱する必要がある。

とはいえ、これはなかなかたいへんなことなのだ。知識の備えがかえってこの離脱を難しくすることもある。例えば、多少の心理学的素養がある場合、先のAさんの「もっと本が自由に読めるといい」という発話にはどんな情報が含まれていると考えがちだろうか。そこにAさんの自己呈示のメッセージを受け止めると思う。すなわち「自分は本をよく読むくらいに十分に知的な人間です」「いいかげんなラベルを貼らないでちゃんと自分を見て欲しいです」という悲痛なメッセージがそこには含まれていると。また「食事の味が自分には合わない」には「今の環境は自分に居心地がよくないです」というメッセージが含まれていると。これらは実は私自身が「現実」に対し一時本気で施した解釈なのである。

これらの解釈はこれだけではもちろん推測の域を出ない。本当に心の声を聞き届けるためには非言語的なものも含めて状況を構成するいろいろな要素を総合的に考えてみなけれ

ばならない。実際、これらの解釈があたっている部分もきっとあるのだろう。しかし、それが固定した「正解」となってしまうと何かおかしくなってしまうことを絶えず批判する精神が大切なのではないかとも思う。あの寮母たちのラベリング行為にしても初発においてはそれなりに「正解」を含んでいた筈なのだから。

人間には「答えたくないことも答えねばならない」こともあれば、「答えにくいが答えたい」「伝えにくいが伝えたい」こともある。どちらのときも技法を使う。またその技法が行使される[いま、ここ]とは絶えず過去になりゆくものであり、固定していない。自然主義的態度に陥らずに自らを含めて[いま、ここ]を批判的に読み説く方法が社会情報調査には必要なのである。

#### 4. 社会情報学的方法の規準とエスノメソドロジー

##### (1) 伝統的社会学が成立している基盤の解体

社会調査とは何なのだろうか。この素朴な問いが再び私の脳裏をかけめぐる。上に述べてきた今回の調査の過程を振り返ってみる。「調査実習」なる状況定義それ自体が「意味ある世界」の構築に寄与しているという事実。浮かび上がってきたのはこのことである。データベースのパノプティコン性を問題とするならば、われわれ自身もまた或る状況の中でデータベース同様、一つの権力となりうることを問題としなければならない。仮に今、社会情報学的方法の規準を構想するなら、このことは重要な項目となるだろう。

例えば、細々とした学歴や職業経歴、現在の仕事の継続意志など「答えたくないが、答えねばならない」ことを敢えて答えてもらおうとする関係性それ自体から何が生まれているのか。エスノメソドロジーはその点の検討を強く要請する。われわれ「調査主体」もま

た現象を構成する一要素でしかないとすると、従来の伝統的社会学の思考が成立している基盤は根底から解体されねばならないことになる。外から「調査対象」を観察できるという思い上がり、その「調査対象」から話を聞く権限を「調査主体」が一方的に有しているという考え方は廃棄されねばならないのである。

例えば、あの「Aさんはちょっと問題の人だからなあ」等々のラベリング行為は確かに偏見に満ちたものであるが、それらの発話はそこに「調査主体」としてのわれわれが存在していて、Aさんについて詳しく聞こうとした事実のために発生したとも考えられる。私という外部の、しかも研究者の肩書を持つ相手を前に、副所長と寮母主任の二人が施設内部の人間として対峙したとき、表現が知らず知らずのうちに誇張される効果が発生したのかもしれない。Aさんに関わるイメージの膨張は「内部に熟知した人間」であるとのアイデンティティ確証という社会的機能を伴っている。このように「物語」の生産現場は相互作用の状況規定性に大きく依存している。

またインタビューの際にAさんがことさらに知的インテリジェンスの高い人間として自己呈示をしなければならなかったと感じたのだとしたら、そこに「調査主体」としてのわれわれが存在していて、Aさんにあれこれと詳しく聞こうとしたためであるだろう。Aさんから見て、周囲からの日頃の不当なラベリングを受容した不安気な顔つきの人間としてわれわれが彼の目の前に座っていたことを抜きに一方的にAさんの自己呈示を語ることはできない。

対象の外に立つ特権的立場の存在を疑うことから情報資本主義批判の社会情報学の道筋が見えてくるのだとしたら、以上にささやかながら行ってきたように、われわれによって老人ホームに持ち込まれた「調査という現象」をエスノメソドロジカルな視点から捉え直す

ことによって今回の調査実習は真に社会情報学的なものになるのかもしれない。少なくとも伝統的社会学の存立基盤を突き崩すことを前提にしてしか、社会情報学という新しい学問の方法論は確立されないように思われるのである。

五感を鋭敏にしてその場の「空気」を感受することがエスノメソドロジストには必要であると思われる。五感の鋭敏さとは何か。もとより録音テープに含まれる全ての情報を余すところなく聞き取れるというわけでもない。われわれは物理学的な音声情報を超えたものを聞かねばならないのである。先に「耳をダンボさんにして」みると言葉になって現れない心の声も聞こえてくると述べたが、より厳密に言えば、自分が或る観点から現象を捉え得るにすぎないという自己言及の姿勢をもって「耳をダンボさんにして」みたときに初めて「心の声」が聞こえてくる可能性が開けるのではないか。それは好井の言い方を借りれば、[いま、ここ]という世界の生成の現場に降り立つことである<sup>(註10)</sup>。

## (2) 発話行為、その相互反映性と文脈依存性

エスノメソドロギーの基本的考え方を理解するのに欠かせない概念が少なくとも二つある。文脈依存性(indexicality)と相互反映性(reflexivity)とである。文脈依存性とは、或る行為の意味はその行為がなされた文脈に依存しているということである。これについては、好井・山田『排除と差別のエスノメソドロギー』にある「ぼくは、キツネ」、「んー、と。じゃあ、わたしはタヌキ」という会話の例[文献(16), p.9]を紹介しておこう。この会話は、蕎麦屋での注文の会話でもありうるし、子供たちが学芸会で配役を決めている会話でもありうるし、動物園でのカップルの会話でもありうる。或いはもっと別の場面かもしれない。いずれにしろ、この会話の意味の確定はそれを支える文脈に依存している。われわ

れの発話行為はいつもこのように文脈依存的なのである。

ここには、その文脈自身が行為によって指示され、前提を供給されているという循環構造が存在する。そのことを説明する概念が相互反映性である。これについてはヴィトゲンシュタインが提出し、ヘリテージらエスノメソドロジストによってたびたび引用されているウサギとアヒルの図（図1）の例がわかりやすい。

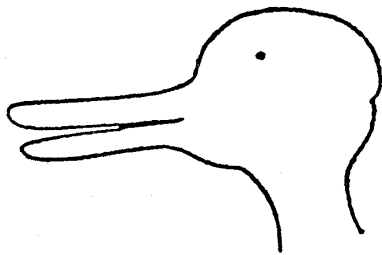


図1 ヴィトゲンシュタイン「哲学探究」より

この図がアヒルに見えるのは、くちばしが左側に伸びているからだ。なぜくちばしが左側に伸びていると言えるかというと、それはこの図がアヒルだからである。逆にまた、この図がウサギに見えるのは、耳が左側に向けてぴんと立っているからだ。なぜ耳が左側に向けてぴんと立っていると言えるかというと、それはこの図がウサギだからである。アヒルと思って見るとますますアヒルに見える、ウサギだと思って見るとますますウサギに見えるのである。つまり、持ちつ持たれつの共犯関係として「現実」が生成されている。

先の例、「ぼくは、キツネ」、「んー、と。じゃあ、わたしはタヌキ」とのやりとりで言うと、それが蕎麦屋での注文を決める会話とされるとそれ以外の何物でもないことになっていく。これが物象化といわれる事態である。物象化による複雑性の縮減は日常生活に利便をもたらすから頻繁に採用されるが、差別や偏見の発生という観点から考えてみるとこれはこわいことなのである。

文脈依存性の存在を指摘する試みは既に現象学によってなされていたが、エスノメソドロジーは文脈依存性を相互反映性と結びつけて説明する観点をこれに付け加えた点でユニークだとされている。エスノメソドロジーはわれわれの認識がこの文脈依存性を相互反映性によって支えている極めてあやういものであること、また「現実」とは人々の認知の仕方次第で絶えず継起的な形でつくられる流動的なものであることを明確化した上で実証科学を志向するのである。

ここでわれわれが考えてみるべきことは何だろうか。或る種の相互反映性が生き残って「正しい姿」として固定してしまい、差別を温存してしまうメカニズムとそれへの批判可能性という論点ではないかと思う。例えば、Aさんの行為のことごとくに「精神病歴がある人」という文脈が付着してしまう事態をわれわれはエスノメソドロジーによって相対化できるであろう。これは悪循環回避の知恵といえる。つまり、周囲からのラベリングを受容した不安気な顔つきの人間としての私が質問者として目の前に座っていたことはAさんの過剰な自己呈示を誘発し、そのことで私が「やっぱり……」と思い、私のさらに不安気な顔つきを誘発し、それがさらにAさんの……という相互反映的な悪循環から脱する批判的理性の実践としてエスノメソドロジーを捉えることもできよう。

もちろん文脈依存性からは逃れられず、どこかに或る行為の静止した「正しい姿」があるというわけではない<sup>(註11)</sup>。にもかかわらず或る行為について、一定の意味理解が可能となり、差別という抑圧を生み出すという事実がある。誤解を恐れず言えば、この抑圧からの完全な「解放」などないだろう。それでもわれわれには問い続け、批判し続ける自由がある。その自由の可能性をエスノメソドロジーは大きく広げる。そのような絶えざる自己言及の中にわれわれは、ニーチェとウェー

バーに共通する「現実」の生成の不確実性に耐える責任倫理という社会科学的観点と重なるものを見出しうるだろう<sup>(註12)</sup>。

### (3) 小括と展望——生成の不確実性に耐える エスノメソドロジーへ

あらゆる「現実」は常に生成されるしかなく、われわれは日常そうした「現実」をいかにも確固たるものであるかのごとくみなしてやり過ごしている。日常生活は「正しい姿」を疑わずに済ませようとする人々の共同行為によって成り立っているが、エスノメソドロジストはそれを疑うことから始める。ただエスノメソドロジーはエスノメソドロジストだけのものではない。このことは注意すべきである。われわれ生活者も「現実」が見かけ通りのものではないことを実はよく知っているし、それに基づいて行動している。先に「答えたくないが、答えねばならない」場合と「答えにくいが答えたい」場合に使う技法に触れたが、日々の生活においてままたらぬ状況に直面し、自らのアイデンティティを確保するためにいじましいまでの努力を払って何とかやりくりしている人々から社会は成り立っている。

そのなまなましい模様については、ゴフマンの『スティグマの社会学』に多くの事例が載っている[文献(4)]。例えば、印象操作、身元隠し、役割距離。いずれもいわゆる「弱者」が自分のスティグマ(負の意味を持った烙印)を隠蔽するための生の技法である。今回、取り上げた例で言えば、Aさんが「精神病院にいた」「情緒的になりやすい」等のスティグマから何とか逃れようとして「本をもっと自由に読めるといい」と述べたのだとしたら、それは身元隠し(covering)の一例といえよう。

こうした「現実」の制作行為を情報操作の一種と捉えることもできる。現に『スティグマの社会学』のII章は「情報操作と個人的アイデンティティ」となっているし、そこには

「社会的情報」という節まである。人は皆、自らの不利な情報を操作してスティグマの発覚を何とかくい止めようとしている。また他者の情報操作を見抜いたり、見て見ぬふりをしたりしている。他者の発する隠されたメッセージを解読してその他者との相互作用を行うというのは日常生活において誰でもすることである。その意味では、研究者だけではなく、生活者もまた十分に社会情報学の実践者であると言える。そしてエスノメソドロジーはまさに「人々が普通に使う方法の学」なのであり、例えば「何の問題ありません」という発話を成立させている状況に内在して人々の息づかいのレベルで「いま、ここ」を見ようとする。

エスノメソドロジーとは単なる暴露の技法ではない。また学部の一部に誤解があるようなので言うておくが、それは外から現実を記述するエスノグラフィーとも全く異なる方法といえる。相互反映性に関わる考察にみられるように、エスノメソドロジーは、限りなく「現実」の生成を批判し続ける精神を原理的に有している。とすると、例えば会話分析をするエスノメソドロジストもまた「現実」の外に在るわけではないことになる。会話分析の内容についても、或る観点からするならこうも説明できるという以上のことではない。従って、自らの立脚点も含めて「現実」の生成の不確実性に耐えることをもし忘れるならエスノメソドロジー本来の魅力は失われよう。

エスノメソドロジーの魅力を社会情報学にとって有効な一つの方法として捉えるという社会情報学部特有の視点から本稿は書かれている。従って、エスノメソドロジーの紹介に関しては不十分な点が少なくない。事例として用いた或る「調査実習という現象」に関する考察にしてもプロのエスノメソドロジストからみたら未だ甚だ初歩的な段階に止まっているかもしれない。また2. で触れた社会情

報学の現代的課題に関してもこれから着手すべきことは多いといえる。そのような準備不足の状況下で書かれた暫定的な覚書として本稿をお読みいただきたい。

## 注

(注1) 例えば、以前に本学部主催の「社会と情報に関するシンポジウム」の報告者の一人(工学)は、選挙の際に電子メディアを使って投票すれば開票作業が早く正確に行えるようになることについて、たまたま前日に見かけたというそのことを扱った新聞記事を引き合いに出して述べていた。絶えず社会の情報化の動向に気を配る技術者としての誠実さは敬意に値するが、選挙という行為の社会的意味にかかわる把握は当日の発言内容を聞く限りでは弱いように思われた。電子投票システムは技術的に可能ではあっても実際の導入には難問が待ち受けている技術の代表例と思われる。

(注2) ポスターの『情報様式論』には「ボードリヤールとテレビCM」「フーコーとデータベース」「デリダと電子的エクリチュール」「リオタールとコンピューター科学」の各章が並んでおり、いずれも興味深い。社会情報学部生の必読文献の一つと言えよう。なお、フーコーとポスターとの理論上の深い関連は、以前にミスコンに働く微視政治学的構図をフーコーの権力論を用いて論じた際に既に触れておいた[文献(6)]。ポスターについてはその後[文献(3)]も訳されている。

(注3) 「〇〇ちゃん」「〇〇君」で呼ぶこと一般が差別的だと言いたいのではもちろんない。そうした呼び方を成立させている文脈がそのつど検証されなければならないということである。こうした検証を個別主義的に遂行しようとするエスノメソドロジ的な思考は、状況と無関係に普遍主義的に或る関係性を捉える方法とは全く異質である。その意味で意識調査のデータを汎用性の高いものとして共同利用しているという方法とは水と油の関係にあるといえるのかもしれない。

(注4) 「障害者」を手段的に扱う「見えない優生思想」が社会理論にさえ含まれる可能性につい

ては以前に言及した。ゲーレン流の負担除荷の観点から文化規範を説明する方法は多くの社会理論に影響を与えているが、それらには不確実性に耐えるという志向性が希薄である点は注意すべきである[文献(5)]。これに対してアドルノらによる啓蒙の「野蛮」の告発は、自らに突き刺さるリスクをもって行われる。それは不確実性に耐える志向性なしには成立しない。また、例えば「障害者」差別意識が「〇〇ちゃん」「〇〇君」と呼ぶ個別の関係性の中に潜んでいることに動的に迫るエスノメソドロジにもこの志向性をみることができると思われる。

(注5) 情報資本主義が身体性の商品化を歯止めなく進めようとしている点については最近の論文[文献(8)]で扱ったが、いわゆる「弱者」の実にいじましい努力の中に限りなく「生活世界の植民地化」を進めようとする情報資本主義に抗するものがあるのかもしれないと今、考えている。それもまた「臨床の知」の一つであろう。なお筆者の知るところでは、情報資本主義という概念は[文献(9)]によって初めて用いられた。その粉川は、羞恥感情を発生させる身体部位の変化に触れ、大脳の中を見られることが情報社会では最も羞恥をそそると指摘している[文献(10)]。また情報資本主義的な支配と抵抗という問題については[文献(11)]も参照のこと。

(注6) 学生諸君も補助員として指導を手伝って下さった北大の院生諸君もよくやってくれたと思う。この聞き取りによって、寮母の一日の労働時間や仕事の負担、老人との関係等々の基本的な事柄について多くのことを知りえた。調査結果については目下、編集中で近く刊行予定の調査報告書に詳しい。また、誤解のないよう言い添えるが、今回の「調査という現象」の一方の当事者である寮母たちホームの職員を非難するつもりは毛頭ない。それどころかたいへん忙しい中、時間を割いて下さったことに心から感謝している。われわれは本稿では、ただ「調査実習という現象」のありのままを振り返ってみたいだけなのである。

(注7) 或る人を「精神病」と認知してしまう関係性を扱ったエスノメソドロジストの業績として、ポルナーの「お前の心の迷いです——リアリティ分離のアナトミー」、スミスの「Kは精神



病だ——事実報告のアナトミー」がある。いずれも〔文献(5)〕所収。また、薬局でアルバイトとして働いていた大学院生とお客との会話をデータとして「精神病患者」排除の模様を扱った最近の〔文献(14)〕も興味深い。そこにはタマエでだけ語る公共的場面から離れた私的領域での発話行為に含まれるすさまじい偏見が明らかにされている。また、知的障害者がいつのまにか「正常ではない」という範疇に収められ、排除されていく経過がなまなましく描かれている。

(注8) この点については上記〔文献(14)〕の記述が参考になっている。好井は「店員」であるアルバイトは、店に入ってきた人物に対してはできるだけ好印象で対応し、「薬」をめぐる会話にまで持っていかなければならないという要請にさらされることになる〔文献(4), p.80〕と述べている。ここで「店員」は「客」とは「論争」することを回避しなければならない関係にある。われわれの調査でも同様に「調査員」は「寮母」とは「論争」することを回避しなければならない関係にあった。

(注9) こうした記述が増えたことについては「先生—学生」という関係性が寄与していると思われる。同様の感触は市役所福祉課でのインタビューの時にも得ている。つまり、「先生」が「意味が薄かったね」と終了直後に述べたことが過度の影響をもった事実が提出レポート等から明らかになった。「先生」の発話が「学生」に「意味ある世界」構築の知的フレームを提供してしまうことをもエスノメソドロジーならば容赦なく問題とするだろう。その意味で今回はあまり触れて来なかった「調査員」の内部関係についての「ありのままの分析」も「調査実習という現象」の解明のためには重要な課題の一つである。

(注10) [いま, ここ]をそのものとして生きることが難しくなっているのは人間を不器用にしてしまうモダンの病なのかもしれない。[いま, ここ]への感受性はモダンが用意した公教育の場になじめばなじむほど失われがちなものである。ところが、情報資本主義社会が生み出したルサンチマン処理産業たる自己啓発セミナーのプログラムには、この感受性を回復する

機能が備わっている。その点において自己啓発セミナーは——意外にもというべきか——「情報社会における身体性文化」として評価すべきものを有している。この点については〔文献(7)〕参照。

(注11) これは「動き」がつかまえられなくなる事態に似ている。すなわち、先に触れたNHK科学番組の脳の或る部位に欠損があるために「動き」を一切把握できなくなっているスウェーデン人女性の世界と静止した「正しい姿」を前提とする伝統的社会学認識とは大差ないことになる。そのような伝統的社会学徒自身の生のありさまを象徴的な形で見せつけてくれたことも、あの科学番組が私に印象深かった一因であるのだろう。

(注12) 「現実」生成の不確実性に耐える自己言及の精神は、データベースの普及を前提とする情報社会における社会科学の場合には特に重要となると思われる。それは監視権力状況において複雑性の縮減という安易な方向にもたれかからずに批判的理性を貫く唯一の可能性といえよう。なお、知の消費状況と関わる「内面」理解の社会学における倫理の提唱はウェーバーにすでに見られた。すなわち、古川順一によれば、ウェーバーは「欲しさえすればいつでも知りうる「脱呪術化された主知主義の時代」に生きる者に要求される責任倫理」を切に求めていた〔文献(3), p.10〕。その責任倫理はストア派と通ずる厳しい自己規制を含むものである。これは「脱呪術化された主知主義の時代に生きる」社会情報学徒にもそのまま該当する内容の責任倫理といえる。

## 文 献

- (1) アドルノ, T.・ホルクハイマー, M.: 啓蒙の弁証法, 徳永恂訳, 岩波書店, (1991).
- (2) フーコー, M.: 監獄の誕生, 田村俶訳, 新潮社, (1977).
- (3) 古川順一: 反時代的考察としての倫理——経済学批判と心理学批判, 未来 No.327, pp. 2-11, (1993).
- (4) ゴフマン, E.: スティグマの社会学, 石黒毅訳, せりか書房, (1980).
- (5) 井上芳保: 「意図せざる結果」論にみる不確

- 実性の処遇, 理論と方法, 数理社会学会, Vol. 4, No.1, pp.117-130, (1989).
- (6) 井上芳保: 二四時間まなざされる構図——「見えないミスコン」の微視政治学, 札幌学院大学社会情報学部教養ゼミナール論集B&I, pp.55-66, (1993).
- (7) 井上芳保: 情報社会における身体性メッセージ——自己啓発セミナー現象再考, 現代社会学研究, 北海道社会学会, Vol. 6, pp.81-104, (1993).
- (8) 井上芳保: 情報資本主義のなかの臨床の知, 日本社会臨床学会編, 人間・こころ・社会, 影書房, 近刊予定 (1994).
- (9) 粉川哲夫: 情報資本主義批判, 筑摩書房, (1985).
- (10) 粉川哲夫: 電子人間の未来, 晶文社, (1986).
- (11) 小倉利丸: ネットワーク支配解体の戦略, 影書房, (1987).
- (12) ポスター, M.: 情報様式論, 室井尚・吉岡洋訳, 岩波書店, (1991).
- (13) ポスター, M.: 情報様式とポストモダン, 光永雅明訳, 山之内靖ほか編, 講座社会科学の方法Ⅷ——システムと生活世界, pp.85-120, 岩波書店, (1993).
- (14) 好井裕明: 日常会話における「精神病者」排除の様相, 江原由美子編, 微視的権力状況における会話分析, 文部省科学研究費報告書, pp. 75-84, (1993).
- (15) 好井裕明・山田富秋・山崎敬一編訳: エスノメソドロジー——社会学的思考の解体, せりか書房, (1987).
- (16) 好井裕明・山田富秋: 排除と差別のエスノメソドロジー, 新曜社, (1991).